

【参考Ⅰ——広布第二章】 昭和47年10月1日 正本堂完工式での池田会長あいさつ

ともかく、日蓮正宗は第一章をここに終わり、本日より第二章に入ったわけであります。あくまでも、民衆のために——。

【参考Ⅱ——広布第三章】「青年よ 二十一世紀の広布の山に登れ」

「その二十一世紀の 山に登りきったならば あとは一切 君達のものである
それからは 広宣流布第三章の 平和と幸福への 歡喜の法戦を 全て君達に託したい」
(昭和56年<1981年>12月10日付聖教新聞掲載)

【参考Ⅲ——池創相對】正木理事長指導(2009年1月)

何故、地涌の菩薩が出現したか、又地涌の菩薩の出現の意味とは何であったか。それを先生はこう言われております。「釈尊という大師匠は、彼らが漫然と決めつけていたような、小さな存在ではない。永遠の生命力を具えた、桁違いの仏なのだ。その師匠の真の実像を、久遠の弟子である地涌の菩薩たちが電撃的に示していったのである。それは、「師匠はこんなものだ」という思い上がりや慢心、「自分はこれまで十分、戦ってきた」という惰性や傲りなど……弟子たちの抜きがたい胸中の限界を打破した。そして、もっと偉大な、もっと尊高な力に気づかせ、さらに、元初の師弟の誓いに目を覚まさせていったのだ」(聖教2009年1月6日付人間世紀の光 上)とこうありました。

私はこの随筆を読んだ瞬間に、ある意味でこれこそが54年問題の本質だったのだと気づきました(中略)それまで声聞の弟子たちは、釈尊のことをこの世で修行を積んで初めて悟りを開いた始成正覚の仏としかみておりませんでした。しかし、我々の師匠はそんなものではないと地涌の菩薩は宣言をしました。久遠の本仏なのだということ地涌の菩薩は宣言をしました。

あの54年問題の本質とは、師匠をどう見たか、どうとらえたか、弟子の側の問題です。先生をただ三番目の会長としかみない、歴代の会長の一人としかみない。そういう弟子の師匠をとらえる視点。もし池田先生が学会永遠の魂であり永遠の師匠であるととらえたら、あんな対応になっていたでしょうか。こう私は思います。まさに年頭最初の随筆で先生がこのことを言われた意味、それはまさに54年問題の本質ではなかったかと。(中略)

そう考えていた折に、あの1月の本部幹部会の先生のご指導の中に、これもさりげなく出てきました(中略)大聖人の御書の「今年は仏法の邪正ただされるべき年か」という一節を引かれ、先生は、それを解説するような言い方ではありましたが、「今年(2009年)は仏法の正邪が正されるべき年であると仰せである」と、こうあの1月の本部幹部会の上のご指導の中で言われておりました。

【参考Ⅳ——師弟の道と師弟不二の道】小説「人間革命」第10巻

●もともと広宣流布の活動は、宗教革命を基本として、それによって広く遠く人類社会に貢献する活動であり、日蓮大聖人の仏法が、行き詰まった現実の社会を見事に蘇生させることを目的とする以上、この宗教活動が、いつか社会化していくことは必然の道程であった。戸田城聖の構想の遠望は、水滸会や側近の人びととの会話で、しばしば語られていたのだが、未聞の活動領域であっただけに、現実の問題として認識するものはほとんどいなかったといつてよい。戸田の壮大な構想を耳にしても、心地よいユートピアの夢として歓喜するにすぎなかった。

かろうじて唯一人、師弟不二の道程を着々と歩んできていた山本伸一だけは、戸田の予言的展望を脳裏に刻んで、秘められた理想を現実化するための窺い知れぬ多くの辛勞を戸田とともに分かちあったのである。構想が未聞であっただけに、辛勞の質もまた未聞であった。

●戸田は彼の膝下から多くの指導者の輩出のために心を砕いていたものの、時期はまだ熟していなかった。

彼の弟子たちは、師弟の道は心得ていたが、広布実践のうへの師弟不二のなんたるかを悟るものはほとんど皆無といつてよかった。不二とは合一ということである。

昭和三十一年の戦いに直面したとき、彼の弟子たちは戸田の指導を仰いだが、彼らの意図する世俗的な闘争方針を心に持しながら、戸田の根本方針を原理として聞き、結局、彼らの方針の参考としてしか理解しなかった。戸田の指針と彼らの方針とは、厳密にいつて不同であったのである。師弟の道を歩むのはやさしく、師弟不二の道を貫くことの困難さがここにある。

ただかろうじて、山本伸一だけが違っていた。彼は関西方面の最高責任者となったとき、戸田の膝下にあつての久しく厳しい薫陶から、戸田に言われるまでもなく、ひとり多くの辛勞を堪えながら、彼は作戦を立てた。

その彼の作戦の根本は、戸田の指針とまったく同一であった。不二であった。彼には戸田の指導を理解しようなどという努力は、すでに不必要であった。

以来、戸田の時々刻々の指導の片言隻句は、彼の闘争方針の実践にますます確信を与え、いよいよ渾身の力量

を發揮する縁となったのである。

彼は一念において、すでに戸田の一念と合一したところから出発していた（中略）まさしく、創価学会の実践的生命もまた、師弟不二である。師弟不二の道は、一念における莊嚴な不二にあるといわなければならない。

●戸田城聖の永年手塩にかけた弟子たちが、全国に散って活動したわけだが、広布実践における師弟の関係を単なる師弟の道ととるか、師弟不二の道ととるかが、はじめてあらわにされたといわなければならない。師の意図するところが、現実にあらわれるか、あらわれないかは、弟子の実践の姿を見れば容易に判断のつくことである。師の意図が脈動となって弟子の五体をめぐり、それが自発能動の実践の姿をとるとき、師弟の連結は、はじめて師弟不二の道をまっとうすることが辛うじてできるといわなければならない。師弟に通ずる生命の脈動こそ、不二たらしめる原動力である。そのためには、師の意図の脈動が何を根源としているかを深く理解し、みずからの血管のなかで消化する強信にして困難な信仰作業を必要とする。その本源の師弟の力は、いうまでもなく御本尊につきる。

たとえば山本伸一が大阪闘争に先立って、数か月にわたる一念に課した億劫の辛勞は、この困難さを避けることなく乗り越える作業であった。そして、師弟一体の実践の姿をあらわしたのである。

多くの弟子たちは、この困難さを避ける。

師の意図に叛く考えはさらさらしないものの、師の意図をただ教条的にしか理解しない。そこで厳しい現実に直面すると、周章狼狽して師の意図を生のまま機械的に同志に押し付けて事足りるとするか、あるいは師の意図が気になりつつも、直面した現実を特殊な場合として、浅薄な世間智をはたらかせて現実に適合しようとする。ここにいたって、師弟の脈動が断たれていることに気がつかない。まことに師の考えるところ、弟子が懸命に考えることが冥合するとき、信仰の奔流は偉大なる脈動となって迸る。師の意図に教条的にただ追従することは、弟子にとってきわめて容易なことだ。師の意図からその根源にまで迫って、その同じ根源を師とともに頷かちあう弟子の一念は、まことに稀だといわなければならない。しかし、この稀なる一念の獲得にこそ、徹にして妙なる師弟不二の道の一切がかかっているのである。

●昭和三十一年一月四日の大阪は、朝から冷たい雨が降っていた。（中略）

山本伸一は三階の仏間までくると、御本尊の前に端座した。そして待機していた二、三十名の首脳幹部とともに勤行をはじめた。彼の緊迫した声調のなかで、しかもいささかの無理も感じさせない豊かな、朗々たる音調は、厳寒の仏間いっぱいになり、たちまち部屋の空気を清々しく一変させた。唱和する幹部たちも思わず姿勢を正し、伸一の深い祈りに呼吸をいつか合わせながら、もはや寒さも感じなかった。唱題に移るころには、純一な強い深い祈りがありありと見られたのである。

勤行を終えた山本伸一は、瞬間、じつと御本尊から目を離さなかった。そして次の瞬間、一同の方に向き直ると、感に堪えない烈々とした語調で言った。

「この御本尊様は、すごい御本尊様です」

彼はまた眼を御本尊様に移しながら、一語一語区切りながらつぶやいた。

「大法興隆所願成就——まさしく関西に大法が興隆して、一切の願いが成就するとお認めになっている。すごい御本尊様です。これで、こんどの関西の戦いは勝った！」

居ならば幹部は、彼の気魄に呑まれて、彼らは御本尊様にいまさらのように眼を注いだ。たしかに、向かって右の中央に「大法興隆所願成就」とある。そして左の肩に「授与之創価学会関西本部安置 願主戸田城聖」とある。このとき、大阪支部長の春木征一郎は、ふと東京の学会本部の御本尊を思いうかべた。

——右の肩に「大法弘通慈折広宣流布大願成就」、左に「創価学会常住」とお認めである。学会本部常住の御本尊は、未来にわたる広宣流布の大願成就を保証なさっている。関西本部安置の御本尊は、関西における日蓮大聖人の仏法の興隆と、あらゆる願いの成就を保証なさっている。関西の会員にとってはまことに有り難い御本尊様だ。さあ、御本尊様への純一無垢な祈りだ、祈りだと春木は心に気づいたものの、それが直ちにこのたびの関西の戦いに勝利することになるとは思えなかった。（中略）

山本伸一が来阪して勤行の直後「勝った！」と宣言したことは、この瞬間の単なる思いつきの決意などでは断じてなかった。この一言が、彼の口から今日発せられるまでには、昨年の秋以来、それこそ彼の胸のなかで人知れず、一念に億劫の辛勞をすでに尽くしつつあったのである。

↑

「これで、こんどの関西の戦いは勝った！」といっても、投票日は、7月8日（日）である。なぜ、半年も前に「勝った！」と言えるのか？ 実際に勝っているのか？ 池田先生は、「師の意図からその根源にまで迫って、その同じ根源を師とともに頷かちあう弟子の一念」「師の意図の脈動が何を根源としているかを深く理解し、みずからの血管のなかで消化する強信にして困難な信仰作業」を強調し、「その本源の師弟の力は、いうまでもなく御本尊につきる」と仰っている。キーは「御本尊」である。御本尊とは何か？ 次回は池田先生の観心本尊抄講義を学びたい。